

競技スポーツにおけるあるべき姿と勝負観

Ideal and Concept of game in Competitive Sport

1K10C435-3 森岡瑛登

主査 志々田文明先生 副査 寒川恒夫先生

【はじめに】

私は、大学4年間合気道という競技スポーツに接してきた。スポーツをする者にとって、勝つためにスポーツをするのはごく当たり前の事かもしれない。勝利への執着心は、多少の差はあれ、スポーツをする以上は「相手に勝ちたい」というのは基本的な考えであると思う。私は、どちらかというと勝利至上主義が根付いている人間であり、合気道で試合に臨む上では、常に「勝利」にこだわってきた。試合に勝ち抜いて優勝すれば、後輩や先輩や指導陣の方々も、私を認めてくれると思っていた。それ故、勝利のために努力してこそ、スポーツをする意義があるというのが私の考えである。そのため、数多くあるドーピング批判から、スポーツの本来あるべき姿を探りたいと思う。本研究は三つの課題をもつ。一つは、競技スポーツに見られる日本人のもつ精神性は何かということについて考察する。第二は、グローバル化によって移り変わる価値観の中で、その精神性はどのように変わっていくことが【第1章】望ましいのか、について考察する。「勝利」について考察を行いたい。

【第2章】

はじめに述べたとおり、私はスポーツを行う上で、勝利を追求するということは当然であり、勝利を得るための心身の訓練は人間形成と結びつき、人間形成と競技力の向上は同時に高められていくことであると思っている。しかし、「勝利を目指すこと」が明確に否定される場合がある。競技スポーツとは、勝利を目指すための努力が含まれるものであって、勝利至上主義のスポーツとは、勝利が義務化された競争スポーツ

といえるのではないか。勝利へのプロセスの中でもたらされる向上心、チームメイトとの連帯感、そして、負けることの悔しさ、挫折感、スポーツにおいて勝利を目指すからこそもたらされる価値がある。勝利至上主義において、これらが置き去りにされた場合がそれであり、一般的にそのようなスポーツのあり方が「勝利至上主義」と表現されて批判されているのである。

【第3章】

ドーピングについて表面的な批判を繰り返すだけでは解決しないのである。何よりも大切なのは、スポーツに関わる人々の意識改革である。スポーツにおけるフェアプレイ精神に立ちかえり、ドーピングが根絶されることを希求することが肝要である。「血を抜いてでも勝ちたい」「人工流産しても勝ちたい」「生命を危険にさらしてまで勝ちたい」そこまでして勝たなければいけないスポーツとは何なのかを改めて問わなければならないであろう。

【結論】

「義務」という言葉も、我々がなさなければいけないものであり、突き詰めていけばそれは我々の心をコントロールすることにつながる。義務を怠るという怠惰な己を制するのだ。「義理」という言葉は、結局「世界の期待する漠然とした義務感」であり、「義務」同様自制心の強化のために必要な言葉である。自制心が強い人ほど、不正行為に手を染めたがらないことは自明の理である。「義」という言葉からも武士道が我々の道徳観を作り上げ、それが日本人のスポーツに対する考えにも表れていることがわかる。